

令和 2 年 4 月 17 日

教 育 長 様

研究コース
グループ研究 A
校 園 コード (代表者校 園 の市費コード)
671489

代表者	校 園 名 :	大阪市立小路小学校
	校 園 長 名 :	石原 至朗
	電 話 :	06-6752-0061
	事務職員名 :	川口 恵子
申請者	校 園 名 :	大阪市立小路小学校
	職 名 ・ 名 前 :	主務教諭・塩野谷寿延
	電 話 :	06-67520-0061

令和 2 年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	グループ研究 A	研究年数	新規研究 (1 年目)
2	研究テーマ	「いじめに発展する可能性の高い児童間トラブルへの対応」 ～子どもと共に学校の安全・安心を築く予防的な生活指導を通じて～			
3	研究目的	<p>テーマに合致した目的を端的に記載してください。</p> <p>本校の生活指導の課題は、「いたずら」や「からかい」、「冗談の行き過ぎややり過ぎ」が原因で、けんかやトラブルに発展することである。</p> <p>今年度は、こうした日常の小さなトラブルに歯止めをかけ、「いじめ」へと発展するトラブルについて、いかにそれを「小さいうちに」「早期に」対応できるかを追求していく。</p> <p>そこで、研究テーマを「いじめに発展する可能性の高い児童間トラブルへの対応」、サブテーマを～子どもと共に学校の安全・安心を築く、予防的な生活指導を通じて～に設定</p>			
4	研究内容	<p>継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。</p> <p>○研究内容 1</p> <p>授業研究については、身の回りの日常生活を見つめ、そこに安心を脅かす子ども一人一人のマイナスの背景はないか、それを作る中に自分の存在が関与していないかどうかを考えることにある。立ち止まってよく考え、「目に見えない」こうした背景・原因に「気づくこと」を学習の柱にしている。指導者から一方的に教える、説教するのではなく、子ども自ら「気づく」ことによってはじめて、安心を「築く」ことができると考える。</p> <p>授業テーマとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いじめを許さない学級・学校づくり」について ・いじめに発展する可能性の高い児童間トラブルへの対応について ・SNSによるトラブルの防止について 等 <p>○研究内容 2</p> <p>学校生活のきまりについて、小路「生活指導スタンダード・モデル」を設定し、子どもたちが安心して学校生活を送ることができるようにする。最低限これだけはどうしても守らないといけない規律を、教職員と子どもたちがそれぞれの立場から共通理解し守り抜いていく。また、月目標・強調週間などで取り組まれる各種の規範意識を高める活動を子どもの実態に合わせて精選し、継続的に取り組めるようにする。</p> <p>重点的な取り組みとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間を守る ・そうじをしっかりとできるようにする ・安全に廊下・階段を歩く 等 <p>○研究内容 3</p> <p>教職員一人一人の問題意識を高め、実践的なスキルを身につけるために、校内研修の充実を図る。子ども、保護者の立場に立った研究を進めると共に、「誠実」「正確」「迅速」な対応を取るための手順や校内組織への積極的な働きかけのノウハウを身につける。研修テーマについては、教員アンケートを用いて「いつ」「どんな」研修があればよいかを聞き、教員の求めを大切に「あってよかった」「やってよかった」研修会にする。研修テーマ例としては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休み時間に起こったトラブルについて、短時間で指導するにはどうしたらよいか。 ・複数の学年にまたがってトラブルが発生した場合、指導の手順はどうしたらよいか。 ・子どもの物がなくなったが、どのように対応したらよいか。 等 			

5	活動計画	<p>日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。</p> <p>＜活動計画＞</p> <p>4月 ・研究テーマ・研究内容・研究方法の設定 ・研究全体会（生活指導年間活動方針の周知） ・生活指導上の職員共通理解事項についての研修会 ・学級のきまり設定研修会</p> <p>5月 ・教員・児童への事前アンケート作成・実施・分析 ・重大事案の対応研修会 ・いじめ防止研修会 ・教職員交流実践</p> <p>6月 ・授業研究会、研究討議会 ・SNSトラブル防止研修会 ・教職員交流実践</p> <p>7月 ・授業研究会、研究討議会 ＜全市公開＞</p> <p>8月 ・授業研究会、研究討議会 ・教職員交流実践</p> <p>9月 ・授業研究会、研究討議会 ・教職員交流実践</p> <p>10月 ・授業研究会、研究討議会 ・児童虐待防止研修会 ・教職員交流実践</p> <p>11月 ・授業研究会、研究討議会 ＜全市公開＞</p> <p>12月 ・研究のまとめ</p> <p>1月 ・生野区教員研究発表会</p> <p>2月 ・教員・児童への事後アンケート実施・事前アンケートとの比較・分析・結果の考察</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p>いじめや児童間トラブルを少なくするための具体的な方法について、児童が積極的に話し合い、いじめを許さない学級づくりをする。</p> <p>＜検証方法＞</p> <p>児童アンケートの「いじめや児童間トラブルを少なくするための具体的な方法が分かる」という質問に対する肯定的な回答をする児童の割合を事前より、事後の方を5ポイント以上上昇させる。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p>授業を通して、冷やかしからかい、叩かれたり蹴られたり等のいじめを許さない学級集団を育成する。</p> <p>＜検証方法＞</p> <p>教員アンケートの「いじめ防止に積極的に取り組んでいる」という質問に対する肯定的な回答をする割合を90%以上にする。</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <p>児童一人一人が「自ら進んでルールを守ろう」という意識や態度を育む。</p> <p>＜検証方法＞</p> <p>児童アンケートの「学校のきまりを守る」という質問に対する肯定的な回答をする児童の割合を事前より、事後の方を5ポイント以上上昇させる。</p> <p>【見込まれる成果4】</p> <p>児童が安心して学校生活を送ることができる環境を整える。</p> <p>＜検証方法＞</p> <p>教員アンケートの「学校のきまりについて、全教職員が共通理解し、指導にあたっている」という質問に対する肯定的な回答をする割合を90%以上にする。</p>

研究コース

グループ研究 A

代表校校園コード

671489

代表校園

大阪市立小路小学校

校園長名

石原 至朗

6	見込まれる 成果とその 検証方法	<p>【見込まれる成果 5】 児童間トラブルに対して、「誠実に」「正確に」「迅速に」そして組織的に、児童や保護者へ対応できる。</p> <p>《検証方法》 教員アンケートを実施して、「児童間トラブルが起こった時、校内対応マニュアルに基づいて対応できた」という質問に対する肯定的な回答をする割合を90%以上にする。</p> <p>【見込まれる成果 6】</p> <p>《検証方法》</p>				
7	研究成果の 共有方法	<p>◆研究発表【必須】 <u>報告書提出日（令和3年2月22日）までに必ず行ってください。</u></p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="406 757 1465 831"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 3 年 1 月 27 日</td> <td>場所</td> <td>大阪市立小路小学校</td> </tr> </table> <p>◆代表校園HPでの共有【必須】</p> <p>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 3 年 1 月 27 日	場所	大阪市立小路小学校
日程	令和 3 年 1 月 27 日	場所	大阪市立小路小学校			
8	代表校園長の コメント	<p>本校の校長になってから1年8か月経つが、嫌なことをされる、嫌なことを言われる等の児童間トラブルがなかなか減らない。そのような状況でも、いじめ防止対策委員会を持ち、事案に対して組織的に対応できているので、重大な事態にまでは至っていない。</p> <p>今年度は、安全で安心できる学校、教育環境実現のためにも、全教員で一丸となって「生活指導」の研究に取り組み、授業を通して子どもたちに「いじめを許さない学級・学校づくり」について主体的に考えさせ、「児童にとって楽しい学校」「保護者にとって安心して子どもを任せられる学校」を目指したいと考えている。</p> <p>また本校は、若手教員の割合が大きく、一所懸命ではあるが十分な生活指導力が身につけているとは言えない。学習指導力と生活指導力は、確かな学級経営をするための両輪である。若手教員の指導力向上につながる本研究をしっかりとマネジメントしていきたいと考える。</p>				